
失恋

日向葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

失恋

【Nコード】

N8274D

【作者名】

日向葵

【あらすじ】

恋が始まる一歩前で失恋したことってありますか？思いがけず自分の失恋を知ってしまった女の子の複雑な気持ちを描いた少し切ないお話です。

耳に飛び込む、どこかの演歌歌手の曲。

一度は耳にしたことのあるその名曲も、2番の歌詞までわからない。周りの人たちの盛り上がりとは別に晶子は妙にさめた目で、

カラオケの歌詞の後ろで流れる古臭いミュージックビデオに見入っていた。

海をバックに佇むトレンチコートをきた男の人と、それを悟りきった顔で見つめている真つ赤な口紅の女性。

一体いつの時代のどんな背景なんやら。

頬杖をつきながらラムコークを少し飲むと、氷をストローでがしゃがしゃかき回した。

来るんじゃないかな。

自嘲気味に晶子はそう思う自分を笑った。

何かを期待していたわけじゃないけれど、こんな予定でもなかった。

そして適当に歌に合わせて手拍子をし、皆に話しかけられれば笑顔を振りまいた。

そう、こんなはずじゃなかったのだ。

「志垣さん、歌いれました?」

えっとと答えに戸惑っていると、話しかけてきた女の子が笑顔でリモコンを手にする。

「せっかくだから、一緒に歌いましょう!何にします?」

あどけなく笑う彼女に他意はなく、それが一層晶子にとっては恨めしく思う。
もちろん、そんな様子を見せる気はさらさらないけれど。

「さあ、こっちに座って」

ぼんぼんつと右隣の席を叩いて、ここに座れと支持を出す。

さすがに断る理由もみつからず、すっぱりと晶子の為に空けられた席に収まった。

「さっきから、志垣さんと歌いたって、この子聞かないんだよ?」

ちょっと困った風に今度は左隣から声が落ちてくる

晶子はカラカラと笑った。

「なんでも良いですよ？ 確かなっちゃんは私と同じ年なんですもんね。」

「なんか、今俺だけのけもの？」

「そんなことないですよ。野地さんが三十路だなんて誰もいってません。」

「今、いったじゃなか！志垣さんの意地悪！」

「なんとも言うって下さい」

そして、ねえ〜とばかりになっちゃんに笑顔を見せると、なっちゃんは小さく笑った。

その笑顔は私の頭上をひとつ通り越して、誰かの為にたぶん本人達も気づいてないみたいだけれどわかりきったシグナルに私はそつと苦笑した。

なっちゃんから話を聞かされたのは、つい一時間前だった。

「わたし、今お付き合いをお願いされている人がいるんだ」

とある社会人サークルで、初めての飲み会。

同じ年だった“なっちゃん”と私はすぐに意気投合した。

あんまり男の人と付き合ったことがないという彼女は

ふんわりとしたピンクのシフォンワンピースに白いブラウスという

出で立ちで

いかにも守ってあげたくなるかわいらしい女の子だ。

私は目を丸くした。

「絶対もてそうなのに」

「ううん。そんなことないの。一度だけよ、付き合ったことがある人は。」

伏し目がちにそっと呟く彼女から嫌味や謙遜は感じず、本当の話だということが伺えた。

「それで、その人と付き合ってもいいって思っているの？」

そう問いただと彼女はより一層伏し目がちに長いまつげを瞬かせた。

「それが、わからないんだ。」

「でも、いやな感じはしないんでしょう？」

「うん。それはぜんぜん」

「じゃあ、付き合ってみてもいいと思うよ。それから始まることもあるよ。」

「ん〜そうかな。」

ぼんやりと嘆く彼女に思いっきりエールを送って馬鹿みたいに励ました。

その時お相手の人を教えてくれなかった彼女だけれど、それは今になったら一目瞭然だ。

にやにやとしまりなく笑う彼の視線には彼女しかうつってないし、彼女だつてまんざらじゃないじゃない。

「志垣さんと私はノーマルです。野地さんが変なんですよ。」

「聞き捨てならないなあ。俺？俺はなつちゃんよりしっかりしてるよ。」

「野地さんに言われたくないなあ。」

「なつちゃん、ひどい。どう思います？志垣さん！」

「ええ？」

自分の世界に浸っていて、ぜんぜん二人の話を聞いてなかった晶子は突然自分の名前が呼ばれて面食らった。
それでもすぐに不自然にならないよう、にっと笑って見せた。

「そうねえ。しいていえば私だけ、ノーマルだよな。」

そう言っつきよんとしている二人にマイクを渡した。

「似たもの同士、一曲歌ったらどうですか？」

今流れている曲はドリカムの「サンキュ」
この曲が終わったらもう帰ろう。

別に誰かを恨んでいるわけじゃないけれど
タイミングの悪さには閉口する。

あの二人は時間の問題。
それは誰にだってわかることで、それをどうにかしようなんて思わないけれど

恋する前に失恋させなくってもいいじゃない。

意地悪な神様に少しでも悪態をついて
晶子は、溶けた氷でうすまった生ぬるいラムコークを飲み干した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8274d/>

失恋

2010年12月28日14時25分発行